令和２年度つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト事業 最終報告会
パネルディスカッション

1. 開催日時：令和 3（2021）年 3 月 3 日（水）16：30～17：25

2. 場所：Zoom Webinar

3. 出席者：

＜進行＞

- 宮林 茂幸（東京農業大学地域環境科学部 地域創成科学科教授、美しい森林づくり全国推進会議 事務局長、森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会座長）

＜登壇者＞

- 天笠 茂（千葉大学特任教授 、第 10 期中央教育審議会副会長、検討委員）
- 竹内 延彦（長野県池田町教育長、森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク副代表、検討委員）
- 辻 英之（長野県泰阜村グリーンウッド自然体験教育センター代表理事）
- 和田 祐樹（ホールアース自然学校福島校）
- 萩原ナバ裕作（岐阜県立森林文化アカデミーmorinos）
- 安髙 志穂（林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長）

4. 協議記録：

パネルディスカッションでの議論の概要は以下のとおり。

- **（宮林座長）**まず、参加者からの質問に答えていきたい。自然体験や環境教育は森林だけではなく、海や川でも可能だが、森林での自然体験や環境教育の優位性とは何か。

- （辻氏）優位性は特に見当たらない。泰阜村で育つ子どもは、海を認識する機会がほぼないが、天竜川に流す水は海へ出ていき、アジアや世界につながるわけであり、そこをどうつなげるかという意味で、森林環境教育の役割は非常に大きいのではないか。

- （和田氏）すぐそばに湖がある場所に住んでいるが、どちらかが優れているという感覚はない。皆つながっているからこそ、森を学ぶことで海や川についても学べる。木々は校庭や街路にもあるので、身近なところにあるという優位性はあるかもしれない。

- （萩原氏）優位性ではなく、それぞれの特徴を生かせば良い。morinos でも海のプログラムを提供しているし、morinos YouTube チャンネルのカメラマンはサーファーである。森林環境教育を提供する際には、海を排除できない。

- （天笠委員）森は森、海は海、川は川で、それぞれ持っているものがあるので、優先順位をつ

けることはできない。それを踏まえた上で、森林環境教育の教育的価値のありかたに話を持っていくことができるのではないか。

- （竹内委員）長野県は海なし県だが、学校教育の中で、臨海学習のように海に行くこともある。自然に対する畏敬の念を育む上でどちらも大切である。

- **（宮林座長）**ワークショップは森林の理解を深めるには有効な活動と思うが、森林の少ない都市部で森林環境教育を広げるにはどのような方法が考えられるか。

- （竹内委員）学校教育は子どもの体験をベースにしている。その中で一番豊かで身近な体験を提供する場という意味で、自然環境を外すことはできない。都会においては活用できる自然は限られているものの、大自然でないとできないことだけでなく、一歩外に出て、石や葉っぱ、虫などを素材として活用することで自然環境教育を展開できる。

- （天笠委員）学校教育の意義は、体験を通じた学びと各教科等の授業を通じた学びが一体化することである。例えば、一人の人生の時間の長さと森林が成長する長さが重なることについて、体験、あるいはいろいろな文学童話、自然科学などから総合的に学んでいくことが、学校という場における教育であり、大切である。街の中でも学校の中でも、様々な資源の中でその種の学習を成り立たせることができる。

- （萩原氏）都会においても、木が一本も生えていないということはない。街路樹もあるし、都会にも公園はある。自分の地面と遠くの森がつながっているという感覚が一番大切である。食べ物や空気、電気など、都市部こそが一番森の恵みを享受しているので、森林とのつながりをつくりやすい。

- （和田氏）子どもたちを大自然の中に連れていくという発想はたくさんあるが、学校に森を連れてくる人が必要なのではないか。萩原氏がおっしゃった「都会こそが森林につながっている」ということを、体現して子どもたちに伝えられる人は限られている。福島では震災後、3 年間くらい外で遊べないことが続いたため、体育館や教室の中で自然について学ぶ活動を実施した。そういった活動を、地域の自然学校等で実施している人と学校をつなぐコーディネーターが必要である。

- （辻氏）自然を見たこともない学生に「身近な木を探してごらん」と言うと、鉛筆や机等、普段の生活の中で自分たちが木の恵みを享受していることを発見する。例えば、教室に泰阜村で育まれた桜の木を持っていき、我々人間が木の性質を生活に活かしてきたことを教えることも環境教育になる。いかに森の恵みを生かして自分たちの暮らしが回っているのか気づいていくというのは、むしろ、教室の中や都会でもできるのでは。都会だからできないということはなく、役割が異なる。

- **（宮林座長）**学校の場合、１年間の年間の指導計画が作成されており、新規の取組を年度内に行うのは難しい。また、新しく森林環境教育を取り入れるにしても、教員側に心理的なハードルがあると思う。どのように、教育界を仲間に引き入れたのか、教えていただきたい。

- （和田氏）色々な〇〇教育等、社会が目まぐるしいスピードで変わっていく中で、学校側も対応に困っている。学校の先生方がどんなことに困っているのかお伺いし、そこに対して、我々がどういったことができるのか真摯に受け止めながら、目指す先を丁寧に擦り合わせることで、同じ方向を目指す仲間になれるのでは。

- （天笠委員）教育課程は、早い学校では 12 月半ばに、一般的には 1 月に次年度の検討を始め、3 月の半ばくらいではほとんどの学校で決まってしまっている。この期間の中で、一般的には、例年通りの教育課程を作ることが多く、様々な専門的知識を有するアドバイザーに相談して次年度の教育課程を検討することは、例外的である。個人的には、教育課程の編成の仕方については、改善の余地があると考えている。教育委員会と学校、専門的なアドバイザー等が一体となって進めていく中で、カリキュラムコーディネーターが果たすべき役割、必要性があるのではないか。国およびそれぞれの地域において、是非ご検討いただきたい。

- （萩原氏）7 年程前（既に新しい指導要領になったが）、学習指導要領を全て読み解いた簡略メモを作成し、学校の先生方と一緒にプログラム（授業プラン）を作ったところ、全部森の中でもできることであった。先生たちが「やりたい」「できるんだ」という雰囲気になることが重要である。まずは一つ、林野庁主催でモデルクラスを作ったらいかがか。皆でカリキュラムを作り、モデル校でできることが分かると先生もまねして導入しやすいのでは。

- （安高室長）モデル事業なら、個人的にはできそうだと考える。また、本日、お話を伺ったような優良事例を広く紹介していくだけでも効果があるのではないかと感じた。

- （萩原氏）例えば国交省がグリーンインフラを進めていくように、どんどんそういったことを事業にしていく流れがある。東京の真ん中でモデル校が一校できたら良い。是非ご検討いただきたい。

- （宮林座長）幼児から社会人まで、ひいては、コーディネーターまで包括的に環境教育を提供できる場はそうそうない。morinos はモデル校としていいのではないか。

- （萩原氏）幼児教育のジャンルではそういったシステムを作り上げ、市町村から保育士として関われる人を育成しようと考えている。学校の先生に対してもそういうことをしていきたい。ただ、morinos は恵まれすぎているので、モデル校にはならない。是非都市部でお願いしたい。

- **（宮林座長）**ではまとめとして、学校教育における森林環境教育をこれからどう発展させていくべきか、考えを伺いたい。

- （辻氏）二つお話させていただきたい。まず、泰阜村においても、先生方はいっぱいいっぱいで新しいカリキュラムを導入することに抵抗がある。他方、既存のカリキュラムの中にも、地域や森林に関わるものが結構ある。例えば、3、4 年生の技術家庭科で棚を作る際に、業者から木材を購入するのではなく、村の木を用いる等。また、理科の授業で「燃焼」について学んだ週の週末には、地域や自然学校の大人が、物が燃える様子を見せて補完する等、連携をきちんとやっていくということは、どこでもできる。コミュニティスクールの運営も含めて地域全体でやることが重要である。もう一つは、20 年位前に森林審議会等の検討委員を務めていた時には、長野県庁から総務部を廃止し森林部を作り、森林を中心に河川部や住宅、教育委員会をつくる等、森林を中心軸とした政策に変えたらどうかという提言を行った。小さな自治体においては、実現可能性がある。既存の縦割りの行政や教育委員会ではない部署が、森との結節点を作る可能性があるので「学校と何か」だけではなく、そもそもの考え方を見直し、林野庁と文科省と国交省等がもっと連携をすべきではないか。

- （和田氏）事業の中にもある「つながる」ということは重要なのではないか。個人的にも、学校と対話の場を設けることで分かったことも沢山あった。自然学校などの民間や地域についても同じことが言えるのではないか。対話を通じ、お互いに知り合う時間を丁寧に確保することが重要である。もう一つは、それぞれ異なる組織等に所属する人たちが、同じ地域、同じ日本、同じ地球に住んでいる仲間として境界線をなくして、（皆ひとりの当事者として）改めて森林や人、物、暮らしの価値を認識し直す時間が重要だと考えている。学校教育での森林環境教育を増やすには、教育課程と連携することで一足飛びに行けるのではと思っているので、県との事業を丁寧に進めていきたい。

- （萩原氏）子どもたちをどう育てようかということを真ん中に据えて、森があれば森を使って、海があれば海を使って、皆でつながってやっていくのが一番ではないか。ただ、日本は国土の 7 割が森なので、森は最高の教材・環境となる。どんどん活用すべきだし、これから森を活用した人づくりの時代が来ると思っている。理想の教育というのはリアルなものになったり、暮らしにつながってきたりするはずなので、これからのチャンスである。

- （竹内委員）義務教育を所管している市町村の教育委員会が、コーディネーターとして役割を果たすことが重要である。学校の先生は、体験学習や自然環境等に関する知識・経験が必ずしも豊富ではないため、コーディネーターをお願いしても負担になるばかりで進まない。文科省が国の予算で ICT アドバイザーの人材を確保するように、森林環境譲与税等の予算を活用できるのであれば、市町村の教育委員会に、辻氏や和田氏等、自然環境アドバイザー、コーディネーターのような人材を、予算を付けてお願いできるスキームを考えることができたら良いのではないか。先生方に対しては、萩原氏等にご協力いただきながら、教育委員会で、子どもと同じように楽しんでいただけるプログラムを作ることができれば、先生方自らやりたいとなってくるのではないか。

- （天笠委員）森林環境教育と体験学習は密接不可分なものであり、教育課程全体から見た時

には、芸術や文学の観点からの森林の存在、活用の仕方も大変豊かな鉱脈があるのではないか。こういう点も加えた森林環境教育のカリキュラムづくり、教育実践を期待したい。また、機会があれば、カリキュラムコーディネーターの実現可能性を含めて、意見交換をしたい。

- （宮林座長）以前は、林学科の専門教育のカリキュラムには、地域の文化や地域の持つ芸術が関わる「森林美学」という科目があった。それは森林と地域の暮らしや文化的芸術的な場面でのつながりが深く存在し、意識していた。天笠委員のおっしゃるとおり、そういう広がりは、もっと教材と関連して考えるとよいのではないか。

- **（宮林座長）**今日の議論では、二つの重要なポイントが出てきた。一つは、学校教育という側面と森林環境教育という側面のコラボレーションは重要であるが、そもそも環境教育とは、それと森林環境教育との関係、あるいは学校教育と森林教育の融合など基本的な問題を整理する必要があるということ。もう一つは、体験学習は地域性があるものの、暮らしとの関係を見れば、都市でも十分に対応できるものであるから、そこにおける体験カリキュラムの組み方はいくらでもあるということ。つまり、環境教育という大きな枠組みの中で、都市や農山村という場の特性を生かしたカリキュラムが考えられること。さらにそれらは、暮らしとの関わりにおいて幼児期、青年期、実年期、老年期というように段階的に育むことができることが大切ではないかということ。こうした論点は、色々なセクターによる横断的な議論をとおして発展し、進化させる必要がある。ということでした。本日の報告会を通じ、将来を示唆した議論があった。総括して安高室長にご意見いただきたい。
- （安高室長）応援演説を皆様からいただいたと思っている。引き続きよろしくお願いいたします。

以上